



七部集大鏡

續猿蓑
匏瓜

五



続猿蓑注解

月院社伊九撰釋
尺木堂公石 著

八九男をくくぬ 降る 柳 二首

西華坊云けりよは物降あり

去来曰我もも

坊云吾先あり木曾塚の旧業ありて或人は句と
曰て云見く難しは柳は白雲の去来は男の松皮葺のそり
よるも中枝のそりてきくおんさの八九男もえくよひるよりの
たるぬの降るふぬりきあむとりこれハ葺ハ降るの
ああさうああさうと見おろしてきりや大佛のあうりえか
柳と尺雲くくるとヤサハ 続猿蓑よたるの鳥の鳥ある

春とらふぬくく春ぬの降るぬりきくハ降るて空ぬる
去来曰我ハ春秋の幸ぬ一ハ別業よあそくこの
ハ葺のそり三ツ有つてきくぬさきくむと有しと八九男の柳
さるハ葺ハらつこころの降りしとヤサハハをよ大仏乃
あうりあうりまやけりしとヤサハハをよ大仏乃
陰丹云ぬハをて二三有上なりハぬぬものなるを云
柳の糸の身つてハ葺ハをよとあひてなるぬハ八九男の上
ても柳志くぬと見ぬるとつて見ぬるりきくぬとヤ
あうりしは説も又とてあうりきくハ記す 笠説葺大全よる
一書曰陶淵明り坪田園君詩曰方宅十餘畝草屋八九
間榆柳蔭後簷桃李羅生前とわくぬりともぬて尺雲ハ
上よかの大佛の都もその合きとて所財の威偶の昨とたり
ぬハハ八九男はかりのあうりぬのあうりハハハハハハハ
雨と見くくちり

一書云 雨のあけぬて 雨のあけぬて 雨のあけぬて
柳の葉は 舞まらば 九層も 雨の降る 地を 何とぞ
曲のすゝれ へば 或は 俳の 事なり 梅柳ハハ 九層 去り
又 詩人の 常にして ハ九層 中々 意あり たりと云
一書云 柳の葉は 風を 吹きて 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
魚のつらみ ことの 見えあり

一書云 けしき 雨の 降る 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
の 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
ころきと 九天 といひ 雨を 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
ハ九層 中々 意あり たりと云
丁丑云 雨の 降る 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
一書云 虚実の 差あり 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
母の 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
何とぞ 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 蔭翫の 竹下の 三匹を 合く 舞向し 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
限り 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
川 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書云 舞まらば 九層 中々 意あり たりと云
舞まらば 九層 中々 意あり たりと云

一書より云草拈を服疾とつる凡枯や志蓋朝花案一
兩章きりよ斧鑿の痕と見守

・ 削やうしよ長刀坂の冬を吹風

一書より云系尾谷と系谷との居は坂阿り又産海の
西の方とよありつらき考一

・ 停約まき人傳 取の 兩

・ けき 藤と魁とつれを後り考

一書より云人高人の多よ處一 女童の似姑あそる

つさう

・ 柳の情一門とをたてたり

・ 百姓よぬく世もも長閑さま

一書より云五柳子り柳一をり一 世と食めや

・ 様葉よりぬる 粟の松あふ

・ 月ハそふれと 輝一をふ 岡

一書より云巴の名の系集り一 漢とを比角一 一ふふ
らむむを楚辞と抄を志し一 越と合の夕や葉を漢と
の抄より楚とありてはあそむけ合をより一 しま
らの玩ふるをそと自物と出せよ後抄傳よあそく
して

至味堂云云後傳師の雜談集子

「和のうらふふ」のくろくふハ

・ 徳う松秀の巻強一 一ふ

の巻もや

三草後よ曰伊賀の連元春の生國よ書のをまふ
抄念くと類よやまうてまうれ御とをと探ひ
後白も傳よ二百斗書らまうて一 冥板も甘まやと有
一よは平年六坂し段故ありてそま交りまふ止よ
より全種ハ美徳の房指うれ自集とをそ和らと

此のよもぢり〜か〜む

愚考杜律曰明年此會知誰健

罪孟の教〜あ〜と 吞 せ〜む

愚考李白う金谷園の杯〜し皇の教三斗〜とそ
王羲之う蘭亭の會罰酒者十六人各詩成不。梵惠王
後群臣作詩送吟給野孟

夏の教や〜あ〜り〜く〜め〜冷〜め

一書よえ水色を會ある。冷〜物とハ慈向〜西ひらむ
又詔の御秋〜池のす〜た〜白〜冷〜あ〜附を
〜〜〜愚考水はひやせ冷〜のよ〜あ〜
糞冷〜〜あ〜れたの底〜も〜あ〜も〜極先〜
〜〜〜あ〜め

愚考〜ユ夫と〜〜〜照 澤

あ〜れ〜事〜事〜よ〜や〜く〜橋の〜

拈佛の形〜よ〜日〜

一説よ〜その〜は〜津の〜や〜長良の〜里〜橋を〜
〜〜〜の〜よ〜よ〜れ〜め〜

一書よ〜愚考の〜日〜日〜あ〜〜決〜よ〜
〜〜ユ夫〜も〜理〜決〜ハ〜人〜と〜橋〜と〜見〜
の〜人〜と〜勢〜せ〜と〜橋〜を〜あ〜こ〜
〜〜あ〜れ〜い〜中〜〜の〜あ〜り〜の〜あ〜
何の橋も〜〜の〜も〜あ〜と〜事〜
〜〜〜あ〜は〜書〜て〜日〜あ〜の〜ユ夫〜も

愚考書書の書〜日〜日〜あ〜〜ハ〜照渡のユ夫〜
〜〜ユ夫〜より〜前〜事〜は〜日〜あ〜
〜〜ユ夫〜と〜附〜る〜もの〜あ〜日〜あ〜と〜ユ夫〜
もの〜字〜法〜の〜邊〜あ〜〜見〜也〜橋の〜

むか
新書は
日和し
夕陽は
日和志

くろくすもあつとくも葉師の媚成ア一々去
未多就却のら附を色ハ貴之の句は西へ方一照應の
工夫とく月よと定めそよの月よとてや落稿の青角
と定めお佛ハ素乃佛よとてハなく通念々本條真の
お佛なるも然とてハそれ守海氣々本條を々々ゆへは
平生昭難一の持佛の教とハ作とるもの之まに
あつて照應の赤教とて月日の歌とハ一申の百の人
おのる前はは傷くゆへとてこの句の御りといやや
天文志曰智高飛西定天氣

・ 某時かよ又とむ けり ち 袖さく
一書よ云古家よ一見つらて集むとすれとさくは
月のおもてふあつとてさくは

・ 形よ何ぬ 茂白もあよ 神 橋
愚考杜子美々詩よ曰鳥入性僻耽佳句一語不驚人死
不休老去詩篇渾漫與春來花鳥莫深愁形よ何ぬ
よまの句もあよの句の趣と喜來れハ花咲き唱とて
喜來花ハ別是初梅之意味深重也
或人難一て曰詩の心よのみをのみて難造の義とす
新おあつ
陳一て曰梅ハ素の花をれハ佳句とてさく一
人と驚さむとて 定よ 柳浩の書ハ記成と也
又難一て曰詩の心を者の修よ述とて杜子美々糟粕
よあつとてさく
陳一て曰詩の心を者の修よ述とて杜子美々糟粕
と書サハ字と僅十七文字の如きとてさく
西又あつとてさく 一人曰

なまきりあるはるよはひてし文君の所音も
破のまきりあるはるよ思ひ出さるる

酒部 為りし琴の音よは憲の花

愚考 史記曰卓王孫至日中謂相如長卿謝病不能
往臨邛令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐
盡傾酒酣臨邛令前奏琴曰竊聞長卿好之願自娛相
如辭謝為鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好音故相
如繆與令相重而以琴心挑之

人の音もかく窺ひしはまろ梅

愚考 窺ハドと吟すし人の音もかくのしとく
かよふいやくあめ細ハ窺もどと疑は梅人のま
まよとのあつる向きなり

草薺のあおとまむ山さく

愚考 草薺のあおは列馬はのまとかやま

下総の信倉より献上の一糸りて形丸く大小ありむ製一
方のかこその成事まも文と信倉のまはよよとハ若
下総ありん

咲かせる花や飯米む十石

愚考 句とりて句よすりものう岩信の肉み人持持
あつちとちと柳外折ハみ人持持の位は小庭よ有さ
はぬへし梅むハ士以上の庭あよりてま人持持乃
五とのうさしりて五石と信倉まきりものんハ
しつハ信信の註し行世し

ハま梅系もらるる系良系外

公石云いし乃系良の部ハを梅く入るよ白ひ
りり外の奇の信成まきりや

まもやけしきとのよ月と梅

愚考 宋詩の月姚宋依る句は梅花好月大清堂

里坊は唯きくや梅の花
愚考惠教和為行黄梅師五祖弘忍大師為行考在雅坊
并白之間於是大悟受衣法居身為六祖唐憲宗皇帝勅
溢大監禪師

● 書よ長刀かくる 兼 藝 の部
一書よ曰寫のむ踏ちくも細腔と大長刀よさうつ
かけつやしくする奇の傳之と云く
愚考長刀丸の附よ

● 大長刀よ ちる 風そ ちくく と云よ
● 書乃細腔 傳の 秘のふり 心
長刀の事ハ武用兵略よ白薙又と元来太刀なり
それよ少くく及とつけて用ゆ。故よ長刀と書く
されハ長刀よ限りて一振云旧遺考録よ曰光仁帝
吳城の兵器よ撰て作し心平信實公長刀の利と

まゆりて一門管をも用ゆあれより一々全体の兵器
と云よ

● 書や 柳 のうらうら 菘 の 葉
愚考書ハ竹よされ柳ハ正月花名の葉抄よ
しや竹まきも鶴の縁よのりまきる葉は柳と竹
とをきれうらうとえゆ

● 芳野西行の歌
船のふれふすささし 湖 の名

● 愚考ニヒカウの歌と唱入るあり 五輪姐よ曰凡魚之
游皆逆水而上雖至細之鱗遇大水亦捨而上鳥ハ凡
よ返りて飛ゆす

● 山吹や 垣 けり けり けり 兼 一 草
一書よ云七草ハ重花ハさけとも山吹のみのみさう
とよなりきりか けり けり けり けり 兼 一 草

一ひさし人にも知れず強しめるく口惜め
むと安きと負のなとを比しその吟中略
鏡の裏の挿梅のさしハ源信明家集より
かみと鏡みそのおしもさるのさし倅影さ集
尔鏡の裏は鶴の形を待つけて作りられハ新よあを
ともちあふいのむらうさむむ回雪のうさそをさる
る今俊明さうよは書を本拠とせられしあは孫と
もはさる叶てるさハつる鏡裏の影を足て思ひ
やりしさしお似たり又梅鏡後とて古梅さあは梅花
の形あるものより俊明よりさる古鏡さしものさる
一書よ云墨梅の詩は瘦損昭陽鏡裏春と云
一書よ曰さるくの説ありとさるはさるく梅高さる
いふハ易は良其背不獲其身行其庭不見其人無君と
いつさるく近思録存養類程子曰人の其止るさる

さるの影さる所以の者ハ欲し動けハ中略鏡の背の梅
も則人の背はあさるハ立附もさるさるさるハ但し
中しさいさかも思慮さるしとさるはさるハ其
脊は良るしとさるさるものさあつけて色男なきさ
をさるしとさる蓋は古鏡より求出せる一書よハあ
鏡の背よりさるものさるさるしとさるさるさる
附さるハさるしとさるさる
去時堂云屈原楚辞離騷曰世人不知鏡裏梅は終ハ盤桂
後師いその國鏡のさるさるさるさるさるさるさる

玉葉集より

人さるさるしとさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
一書より白陰おさるさるの梅は灯をさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

つらきものゝもつて云はると食すり時ら老せし
命苦しと哀し嘆けりしは彼女子を食し
は百余年と経たりと云く
同国空印寺は八百比
五尺の木像有と云云

・ 曉り 雷とてさきつや
ほくほく

愚考 ヒマウ之五韜俎曰電似是霰之大者但雨霰寒
而雨雷不寒霰雖晴而雷易晴如驟雨余在齐鲁四五月
之間屢見之不必冬也史書所載電大有如桃李者如鷄子
者如谷者如斗者如氷ハヒマウもさきつやの電よりあり
曹陽雜俎曰木再花夏有電又慶安二年五月十三日武野
川越之後 電とて大ニ斤小四十女あり人馬多死

・ 燕のむち 心さや
燕

愚考 僧聖徒の詩も燕子 辞業始到家社能啼
處在天涯是等の意も似たり
浪いりも能因りなけり 社宇

一書りの云言平浪よやう牛をさうさうの時を能因り
啼きのさうさうさうさうさ

愚考と食の平と能集よさうさうさうさ例あり
時を浪の意もさうさうさうさ啼きをけりらむ
不さき浪のわさうさうさおふさうさ

・ 浪るのさや 上さうりりる
浪 の象

愚考 夜を浪と云せこゝ来るをさうさうさうさの意は
ふるさういかにさうさうさうさ浪るの意もさうさうさ
西京雜記曰目明得酒食一灯花得錢或乾醋等而
行人至如珠集而百事喜

・ 石うや 喜つぬく 夕すしこ

愚考 夢中りぬかの賦も 馳と書きてむふと云たり
去海の入はるさうさ有象と云くさうり 和名抄ニ鮫

・ 蔵人の體もさうさうさうさ
公石云古今の命も高人の命も帛と云くむのり

晋陶明とくやむ

意形、至其の、一書也

タカシロ
簞

一書、云晋陶明とくやむとありて、
なり、傳、少曰陶明、為彭澤縣令、時郡守遣督郵至、
吏白、當束帶見之、潜歎曰、吾安不能為五斗米折腰向
卿里小兒耶、即日解印綬、尋去、以時、
有、行、を、和、の、ゆ、ハ、ナ、音、一、官、と、止、て、里、の、ゆ、
枕、と、言、う、く、し、世、師、と、共、涼、一、き、と、為、の、
ヤ、ハ、少、う、う、と、ま、く、

愚考、主解、云陶明の傳のみ、
涼風暫至、自謂、義皇上人、
又笑、苑、類、纂、曰、采、
神三篇皆寓意、高遠、蓋第一、
文章、幸、獨、在、此、篇、耳、
時、
德安、衆、と、
云、好、半、自、克、と、
名、月、二、白、の、
今、の、
を、
と、
流、
の、

文章幸獨在此篇耳、
時、
德安衆と、
云、好半自克と、
名、月、二、白、の、
今、の、
を、
と、
流、
の、

十年著一尉言其真也其入志を告げし終り
疎せぬ歎けし作しぬ兼の友

五考揚去は東素の居士とて陶淵明より東素
ハ為陽縣として原栖の地あり無法乃尋ハ淵明の
ゆゑとてとるなり人見井田老人ハ元禄中の老儒
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり
一書ハ志あるを能く聖事終の筆成るなり

我肯願遊將去也適彼東土碩龍こゝ爰得我
所志の志りて古解ふかたるあまをなぐさめ
まゝして草をの籠もくくはくして長衣のくく
くはくハま後突の地骨碩龍を籠り爰悠也
あり

● 胎書や浮世をとりて終麻や

子將去西上人終麻山くき世をとりてよりす
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
乃思くまのまののり馬なりと祝くくくく
を

● 之書のの庵のくくけハ終ま

豆考西り上人二兄よあをくくくくくく
て糸糸を依くくあひくむその侍るくく
● 極は柔る情や極く小豆粥

抱後云太平清覧曰正月十日作青粥以祀門戸
又書之類聚曰別里風俗正月望日祭門先以楊柳
挿門陸楊柳枝新猶仍以酒脯飲食及豆粥挿箸
而祭之又拾芥抄曰正月十日亥時煮小豆粥为天狗
祭為中索上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無
疫氣一掃也くくくくくくくくくくくく
公事根原曰寛平年中は極く煮く

● 若くして急をなめくくする付あ

けりのおみやを若くくくと信書よまやり彼さける極
柳のさくくくの極の無く一應ハハやく極くくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくの急をのくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
先者きわくくくく極くくくくくくく

ひまわり

まはりののちり甲字控を更乃奇よま後や社奉の
く乃あけけて若いりのあめの際よま後
疑事なまのま

信濃何丸撰釋

序文の始末

愚考、莊子子曰、惠子謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種、我樹之成、而實五石、以盛水、漿其堅不能自擊也、剖之以為瓢、則瓠落無所容、非不鳴、然大也、吾為其無用、掎之、莊子曰、夫子固拙於用大矣、今子有五石之瓠、何不慮以爲大樽、而浮乎江湖、而憂其瓠落無所容、則夫子猶有蓬之心也、又後漢書列傳曰、費長房者、汝南人也、曾為市掾、有老翁賣藥、懸一壺於肆、頃及市罷、輒蹠入壺中、市人莫之見、唯長房於樓上觀之、異因往

再拜奉酒脯、翁知長房之意、其神也、謂之曰、子明日可更來、長房曰、謂長房翁乃與俱入壺中、唯見玉堂嚴麗、又藻志多、藻ハ水、壺の象なり、志の誅きをいふなり、又え、鵝の志ハ壺中、天地乾坤外、出の意を摘て書する、之に南此、頌多、江、湖の人多き、是則りて、数字をひさこと多き字なり

● 木のりと小計と 饒と 嶺と 一書ハ花山院の製ハ木此下をすハ一とす是ハ花の流ハ花ハ名ハくハとハなりハなりハなりハなりハ一書ハ西上人の木のりとハ旅録をすハハよりハ北山花のハすハ方ハをハきハなりハなりハなりハなりハ知柳曰古今集ハハ侘人のわけハてハ之ハよりハ木の

月とを頼むにけりてみせふらりその愚者
口を閉て守人の心よきなり

● 月待て飯の内裏の目
● 頼 白はらる 頼ありとやわき

一書よ飯の内裏よ附るるを大嘗會の時
愆^キ主^キ記^キ指^キを^キは^キく^キ頼^キ白^キあり^キを^キを^キ献^キ家
拙丹後國よあり愆^キ主^キ記^キの指のり千
載集よ雲田の里に指をよそはけり
よあり 愚考日本紀廿九卷曰天武天皇
五年九月丙戌神友奏曰為新嘗十國郡
也^キ齊^キ忌^キ則尾張國山田次丹波國河沙歌
並食と云く新嘗祭用明帝二年初指を
神よ供す是則新嘗之愆^キ主^キ基^キの謬字
先^キ千^キ載集よ大嘗會主^キ基^キ方指春次丹波

困雲田をよあり刑部卿龜若らめはら
きてめり云々後代を建た雲田此村の指を
よそはけ

● 云々をよありよ後らり 二五

愚考夷雨村五月五日立社の時とさ
よしよ後らりて此の時飯の糝あり
法よ曰同季を五台去中よ此の季をけ
きたる林白去もをり鞍れけより袖をた
露のるよ此の季をりよ建たる時飯此白
ありてなるとよ遠ひて附台噴ひる格
別と此款又かき

● 千部よむ差の盛の一文 田

愚考手記を聖武帝天平二十年七月
法華手記を始て初ひるよ田派よあつて

本朝修成のりより十代目吉良上人寛正年中
下中玉なる因より今の一月田は移して本山より
子より八上十日丑年八中十日寅年八下十日の
降去の三朝修成と一朝より毎季三月傍百人
まで持渡は上十日を本お終と云中子終未お終
と号くは十日の芥子終千部とて又修成は
後去侍門院の御新所より亦くも門院の
号を揚ふ乎お信長公の割礼亦あり

● 礼死る 名 の つけ ろし

愚考も礼のるより花山法皇三十三所の観音
又巡礼よりより後入主礼亦を巡るを初云
埃囊抄世傳より曰花山院の適世の後巡を微
形より入去程より礼をすよのり
既観考を思まむ故るより亦僧紀伊玉那智

● 山より始り天流玉谷汲より終る

● 然野 見えよきと注多しなり

一書よりある由形るよりより見る時必花山上
皇の侍るなりと云く 一書より白川法皇ると
の侍るなり 愚考も花山法皇より連ん然野
より限らぬ白川法皇より保元記より然野
淨を有りて聖年最御敷度の由ある
事ハ形く 愚考より心包ハ増鏡より歩る久
仁親王の年十一然野より去りより一書
よりはらるる事連ハ注多しなり此初より叶り

● 白鳥弓 紀の関 あり 禎 あり

一書より続日本紀より曰菟野高人の古より紀列
白鳥の関より獨の娘を持その女子高人を
意も女の指より弓白鳥と成て化より去の

疑怪吳弁終不出と云く 愚考此故るハ
は白くもや古指の注るる多末古を紀此
りらら翔るり紀の関ちとる紀刻と和泉
の境桂山の関ち山に在司次帝の象よ
傳く一ノ天弓るり元来ききちと中を横
るりりて多たろちと唱る守とちや此天弓
の象吳を後よ者一ノ解す一ノ一ノ一ノ
を紀玉津玉と一字あるを元明帝初
一て玉く玉歌天獅の名二字よ改補一
あり河橋津紀伊に改む此於郡名よふ
を教多あり頑々尚書曰父頑母器注よ
云注法あり徳美銘よ曰頑々世智の形と
さ進んまを次の白よ酒てとげさるあり
るりくと世能器才ありて酒汁吞らるるの

附あり一

● 双六の目を親くちり考あり
大、節曰杭子紙よきよけらるるをこの双
六を用むと云ふらるるやあつぬよやや
くさとして多いよ火をたつくけりて
くさくのさいをさるるらとちよさい
是ねん 愚考名物云然よ曰博双亭
よ曰西三よりの路り曹魏よ流儀一日本
双陸宋洪遵博双云白木を盤潤可尺
汁長尺五寸厚三寸刻其中を路置二
幣子旅行筒中撼而擲法盤上祝其
采以行るる女中五棋子供る先帝
一爰去る勝儂人甚好之兩人對局自
朝至暮石已僂親老亦移日不去云の

朝方の書よまゝにして止む。是の書目を換へて去らぬの初をえりぬ。そ又双六の目録朱四々唐古字揚子妃と兼戦の時重四出り及て緋衣を繕ふと又兼二二の後一兼院巨下と打り入内重三兼上五位を繕ふ中子集の略文有り。兼朝方の古値を繕へぬ朝方長尺二寸を十二寸を表し横七寸二寸を七十二候の法有りとい。唯口方有り子集の病。

一書のみま交恵見らへしと又続字集
愚考本期遊史曰兼好忠上法多ふ在
兼好阿と兼好一書て兼と兼を以阿と乞
入固て相方の兼を以て心をえり兼阿又
兼しくは兼ふ又兼を以て兼少し兼

ららのみま交恵見らへしと又続字集
ふ兼好の許有り兼好兼好之せありあり
ひるるを兼好よ記きておはすし福
さめのうり兼好あり兼好あり兼好あり
ふ兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
む一兼好逆よ兼好あり兼好あり兼好あり
一兼好逆のあり兼好あり兼好あり兼好あり
こ一と兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
くまうせひ兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
おはし兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
ふ一兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり
愚考兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり兼好あり

る嶮岨よ狭く石言く本根ほんねひこり牛
る雲物の通り一きふありけ 彌本やほん揚峠と
りよとこや

・杖のりら宮子のそりを身ひたり
一書ふ大塚まゐるくの侍るらつーと云こ

・赤いしるしー美やうれんとの書

・庄野の里此 夫ふたときき

愚考飛山ふいく美のみ阿のとりてとてめ
むくしるるきふれらる庄野を附て前白を
飛山の美よりよ古歌を括ー言ん此美と見
て庄野とるよりひけしり此中うふ古人の
版の中を割て見くさうふりよまらと
わこりるーを連とて阿くくはといひと
又きとくーさハさりるくく名亦旧語人各

るく勝も次才ふあるれ見込りるく出ー
くけり等一の産例りもるまじうー口をつすの丹

・志保のさす楳のトありて和見こ

成美曰ふ波の海上るるさこことさき連ハニハヒ
とよむうよりーとやあゆえ文の以爲大郷阿
さ日さす葉名の海のみハよりと波の心よ
のりて渡らむ万葉詞飯の海のみよよくあし
りの蕨の丹さ連て見ゆの海士の物舟

・遠より敷をえぬあま連ーして

・汗の息をくくて衣をえん踏ー

・志まきりらふぬまうらあけてある

愚考世能お後ふ曰本院の侍従といふぬ色
一物といふ女あのを連をぬ色身一といふ平伴
一の書ふ死ぬしと意ーを連とてすしつこひる

とてふよき日五月の廿日と云ひて是れうきとて連
てありけり今宵一もゆのたぬとてこの夜さ
むと悲ひてその人の掛合をばしとて入
てゆくとていふり髪をすてるとすよは後の老
中たのりけり子を志まてつとといひてはつら
おぬきて終一のやまてとてしあるとて平仲ら
らやみりみりて五月二十日と云ひてあり此
際うきをばしよ三日目の雨なむむと後二平
仲の侍ときむ花を三日に返りとりよ

城下

愚考此書書るるて一もを淑徳のふ似
とて連とて教生とて守ゆの時を雅とてい
又田舎りの、黙的とて守るべきとてい
是れハリや秘者古角の徳とて書るるあり

近海の舟よ人の親の徳の徳子うらふ
多りるる見え及ふる徳の罪人此上やあるべき

林の夜 産の物 ありの声

女 希 花 心 細 なるよとていふて

愚考此書書るるて一もを淑徳のふ似
とて連とて教生とて守ゆの時を雅とてい
又田舎りの、黙的とて守るべきとてい
是れハリや秘者古角の徳とて書るるあり

兄弟を二白引よとていふる

そまは世をみるみくゝとぬと 時五と

愚考日鏡上人の改新古今集よ見ゆ寂
莫の言の志をの志ゆきよるみくゝのぬ
のつゝぬ日そるきを冊の山望の窟よそのぬ

● 雲車よのの熱の抱女の巻きよよ

● 一糸よはるく 丁 百の 勢

愚考也熱を丁百ありては勢の安きよ不勢
よりの下を曰文勢の通有るく 函函勢鑑よ曰
唐云宗皇帝安録山ありすぬめりて百又此
ろらるを曰文運上すと云く 不勢事案よのよ
つう 勢林玉勢よ曰玉事為三司使征利剥下
緡錢出入え来以八十為陌每出 錢陌必減其
三言後又為从子勢除五文本朝多て云く 和漢
云才品後よ云山勢と大津上人関を云よよ系

師よ往來の商人より 百文よ有 二文はく
の裸役をえ往返よて云く曰文の不足く
又上於憲政の家志平尾 亥云をるる
代よを欠満あり云久の改る事ハ代物を
九十六文よりて曰文の欠満勢り一と和夏
始よ見ゆ日本錢を日本紀持統天皇八年
講錢目を並

● 古きくもくち此錢よ 後 念

愚考東鑑曰為後後守以奉初博奕未事
經沙汰双六者於侍者可被許之至下賜
永可令停止之曰一準錢目勝以下移之云
忽不倫上下一向可被禁制之由被信出也
り一うやうの勢を
● 時くも百姓よも鳥帽子よそ

ふろ為るくりよまき龜まき人よ言て曰此度不
良ありて若う為よ好らりと法入乞を怪し
むまき人龜を吳王よ獻らむと欲してふよ
まてゆまき夜裁里とりよ岸よ航をばらまき
て泊りまき此まき所の樹の夜中龜を呼て
云勞まらうまき元統何を物らや龜言云我
物繫まらまき連て特よ意まらら一イマシハリ是
我を法まきまき何まき一樹の云吳よまき法
尊え遊何り必まき我ホりめまき樹を求めて
意まき龜の云まきくりのいよまきまら連禍汝よ
及まき心樹則點す吳よま至て王よ獻す強指
人命して乞を意まき一む薪万車を焼とい
一とま預えのぬ一法尊恰を呼て乞を

言ふえ避言て曰乞を烹るよ老索を伐て
せしむ忽解むと獻する人の曰龜と樹と同
言せしむを伐る則彼樹を伐ららて意ま
よま立所不解るとまき一は縞の門舌六縞
の根烹らまき何まき鳴せしむ死してい
ト龜の蓋られまきま意まらら乞牛糞の
賜不應に又此まきを東坡に坐右の銘に曰
坐中談笑慎桑龜一牛糞ハ龜の裏句く
百姓の木棉志まき人よまきの来て
愚考博物志まき曰十一月十二月甲を裁く
よのまきまきすまきれまきまき木棉志まきまき
まきの来てまき初まきをまきまき三とまきの其
毒氣を憚りまきまきのまき
・小糸まきまきまきかまきの繩

をうら我新りのそくうが人の魂をふりこ
ふよりりてまえ三大師もあつ
一書り山田舎
りて苗代の呪い角大師の札を竹縄をよ
とせみしてまゝあつり 左江曰我伝流りて
苗代の呪い蛙のなりしうを串ふしてま
ま 愚案宜るるるを讀せり此るよ角大師
井出の蛙のひかしく形

・ 誓ふををあらまきりあれぬよ
・ ろの舟いりみり 供の侍

・ 須テをあり物不自由るる甚也

愚考河氏須テの巻紫の上のふまよ
て須テ一丘迄の侍るる紫の上を格別のは方ふ
より誓ふの河よ一とどりしお後何すも文
るまは咄すまては侍梯の巻のは息ふの舟れ
まのふまよふ等しそまは須テを附て紫
の上よまむは三台の流りあり

・ 狐のおそり 号 うり よきり

愚考河氏らとりし書りふ者しうたれまうし
須テの内裏の時狐の表を製きくらまむとて
白狐を精とむと信し 紀刻雄の山の園さ山
口次郎の方一号を借しゆりゆ物りよ茶夜山に
この家よ狐の来て目此度須テの精狐の我身
よ及ふ事ををなげきうはまて不問語を
りしりし老狐を毛落て淫ねく宝とす
よまらひ此語を公よはけて精狐のるを
思ひとくありありやうりよとさめしと物りち
ろの山に奇異のおりひをまう 彼我家よ傳
ふ所の年米号堅く庫茲しして永く教

生を止むとるなり此等程しの怪後ありて
とも夫を尋ちといふ以のりる事違ハ不用なり此
類を狐といふる日本美談記に云或狐女
も化して或人の妻も成て子をもうくも後
家の犬も泣く婦ら違身を祈るも一々
去て二度家よりつらん此時耕桑と名付
りりといふ夫より一首の歌あり意しや
戸もねらぬ玉座をひそくよ見え
し子少しよ狐を来ッ寐りといふ河を
不習り

らる花より電鼓引する考ありて
小鼓のる場よりゆりゆり

愚考雪鼓之和事始よ云于村休茶を
の附路次入の折電をいよて茶殿の裏

牛の皮をゆけてとるなり此所を天正十六年
大岡秀吉公北野ふねのて大茶湯を催したる
百間の長屋を建て大小名も勿論大會を
おとされるとて雪鼓北野の馬場を附て
二木の間に茶湯を拵せしなり

神社考曰北野天神者右大臣道實公之靈
也昌泰四年正月二十日左近筑紫延喜三年

二月廿五日薨干配所葬于安樂寺天慶三年
菅靈託七条坊婢女文子欲播右近馬場天

曆元移立祠于北野正曆四年五月遣勅使於
安府安樂寺詔贈大政大臣正一位

追考
の鳴りの故事を冷泉為家卿。川添みらののりれを何ぞしけの
るらむき

